

短篇文学全集 40

沢光治良

部知二

山義秀

崎春生



責任編集 白井吉見

筑摩書房

日本短篇文学全集 第40卷

昭和43年12月25日第一刷発行

著者 芹沢光治良
阿部知二
中山義秀
梅崎春生
発行者 竹之内静雄

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
郵便番号 101-91
電話 東京(291)7651
振替 東京4123
製版・明和印刷
印刷・多田印刷
製本・鈴木製本
定価 360円

目次

芹沢光治良

芸者……………三

死の影……………三

大佐と少佐……………三

阿部知二

野の人……………五

城……………九

赤毛の犬……………一元

中山義秀

月魄……………三二

厚物咲……………一五

秋風……………一六

梅崎春生

輪唱……………二七

眼鏡の話……………三三

紐……………二四

蜺……………二〇

鑑賞(進藤純孝)……………二七

装幀 柄折久美子

芹沢光治良

芹沢光治良(一九七)

明治三十年五月四日静岡県沼津市に生れた。沼津中学より一高・東大経済学部を卒業した。大正十四年渡仏、文学に専念したが結核に倒れ、スイス・フランスで療養して昭和四年帰国。五年「改造」の懸賞小説に「ブルジョア」が当選、作家生活に出發した。明るい知性と抒情的な特味に加えて、長篇「明日を追うて」、短篇「橋の手前」など時代に苦悩する知識人の立場を描いた。十七年「巴里に死す」を書き、十九年「離愁」「故国」を書く。昭和二十六年世界ペン大会に日本代表として出席した。「巴里に死す」三十年刊の「巴里夫人」などが仏訳され国際的な評価を得た。その後「告別」「愛と知と悲しみと」を書き下し、更に昭和三十七年から自伝的大河小説「人間の運命」を書き下し四十二年全十四巻を完結した。短篇集に「盛果」「鎮魂歌」「芸者」隨想集に「心の窓」など多くの著作がある。

芸者

「ムツシユ、最後にお願ひです、ゲイシャ・ガールに会いたいのですが——」

フランスの女流批評家のマルセル夫人が新太郎に突然そういった。

「会いたいつて……芸者にインタビューをしたいんですか。それとも、芸者について調査でもなさるんですか」

「いえ、いえ、そんな大袈裟おおげさなことではなくて……どう日本ではいのですか。ゲイシャ・ガールと遊びたいんです。ゲイシャ・ガールを買うというんですか」

「だって、マダムはあさつて出発でしょう。今夜と

あすの晩しかないじゃありませんか。あすの晩もお約束があるんでしよう」

「ゲイシャ・ガールと遊べるならば、ほかのお約束なんか、みんなおことわりしますわ」

まったく無茶な話である。突然に今晚か明晩、芸者遊びしたいといつても、新太郎は花柳界かりゆうかいに縁がないから、途方とほうにくれた。

「婦人はゲイシャ・ガールと遊べないんですか。東京にいるフランス人に頼んでも、だめつていつて相手にしませんの。もう貴方あなたにお頼みするよりありませんけれど……たしか、アグネスも貴方にゲイシャ・ガールの家へつれていつてもらったんじゃないませんか」

アグネスとは、アグネス・シャブリエと呼ぶ若い女流作家で新太郎のパリ時代パリ時代の旧友の妹で、二年前の歳末に世界一周の旅の途上東京へ立ちよつて数日日本ですごしたが、その時一晚、赤坂に招いて遊

んだことがある。

マルセル夫人はこのシャブリエ夫人の紹介状のほかに、新太郎のパリの出版社長、ラフォン氏の紹介状をもって十日ばかり前に新太郎を訪ねて来た。ラフォン氏の紹介状によれば、前年の秋新太郎の長編小説がパリで出版された時、マルセル夫人がいち早くフィガロ紙に取りあげて、激賞げきしょうしてくれたそうであるから、一種の恩人というわけだ。

その時も、新太郎は夫人の短い東京滞在をみのり多いものにするために、できるだけのことをするから、何でも申出て欲しいと話した。

マルセル夫人は平和回復後の仏印を視察に来て、ついでに日本まで足をのばしたのだといっていた。仏印に平和が来て、東洋の各民族が独立するのは嬉しいが、カンボジアやベトナムの未開の土地に、多年フランスが資本や技術や科学や知識を注入して、健康と豊饒ほうじょうな文明を築こうとした業績が次々にこわ

されることが悲しいと、口早なフランス語をまくしたてた。フランスは仏印をいわゆる植民地扱いしたことはなかったと、被告のように熱心に弁護するのを、新太郎は微笑しながら聞いていて、その愛国心を羨うらやましく思った。フランス語のわかる日本人に会って嬉しいとて、初対面なものにもかかわらず、顔面神経が疲れるまで話して、のどかに笑いあった。

その際、芸者のことを持ち出してくれれば、どうにかできたが、ただ東京案内にフランス語を話せる日本婦人を紹介してさえくれればという依頼で、それも、東京のフランス人と交渉のない婦人がいいというので、東夫人あづまを引きあわせた。

東夫人は外交官の娘で、パリの女学校を卒業して、海軍の将校と結婚したが、今では未亡人になって小学校五年生の娘をつれて実家にもどり、フランス語の翻訳か創作をしようと試みていたから、マルセル夫人の案内役には適任であった。東夫人がどこをど

う案内したか、ともかく十日ばかりして、その晩、新太郎がお別れのつもりで、晚餐ばんさんに自宅へ東夫人を招待したのだが、

「東京って、世界で最も非人間的な都会ではないでしょうか」

と、蒸気機関車のように吐息といきした。

「どこへ行っても、まるで人間の渦か流れのようで、その上、行けども行けども、人家がつづいていていでしょう。その人家が、人間の住む家のようにではなくて、地にひれふして埃ほこりをかぶっていますわね。あんな家では落着けないから、人々は街へ出て彷徨ほうこうするのでしょうか。未開地の密林のなかのように、東京の人々は孤独じゃありませんかしら。だって、そんな風に貧しく、悲惨な人々の多い都会のあちこちにとてつもない歓楽の場所があつて、世界のどこにもない消費がさかんに行われているのですもの。まったく東京って理解できない都会ですわ」

そう、東京見物の結論だという風に、話したあとで、ゲイシャ・ガールを見たいというのだ。その結論とその申出とはちぐはぐであるがしかたがない。夫人を満足させなければならぬが、しかし、その夜の晚餐後か、翌晩しかない。新太郎はシャブリエ夫人の場合と同様に、やむなく弟に電話で頼んでみた。

この弟は父が芸者にうませた子供で、今では或る会社の重役として羽振りはぶはいいが、若い頃から新太郎を敬遠している。二年前の暮にシャブリエ夫人からやはり芸者を見たいといわれて、弟に相談したことがある。

「芸者遊びもしないで、よく小説が書けるものですね。どうです、健康にもなられたのですから少しは遊んだら……兄さんの小説にも多少色気が出て面白くなると思うがなあ」

そんなにくまれ口をきいて、赤坂の待合を紹介し

た。女将にもよく頼んでおいたから、これから利用したらどうかと勧めたが、新太郎はその後、待合に用もなかった。あれから弟に会う機会がなかったが、陰口はよく耳にはいった。

「お膳立てをしてやっても箸をつけないのだから、兄貴は変り者ですよ。あれでは女が書けないのも当然だし、小説も売れないだろうな」というような類のものだったが――

マルセル夫人の依頼で、新太郎が電話で弟の行き先をつきとめて頼むと、直接赤坂の待合へ電話をかけたらしいじゃありませんか、女将は変りませんよと、しかもづらが見えるような答だったが、無理に交渉してもらった。翌晩は満員であったが、弟の顔で、部屋の方も芸者の方もちゃんとさせた、間もなく恩をさせる電話があった。そんな交渉中に、マルセル夫人は新太郎の細君に家のなかを見せてもらったのか、初めて訪ねた時には、

「ほんとうに閑静な場所で、可愛いお家ですこと、お菊さん（ロチの小説）を読んでから、私が夢に抱いたような家ですわ」と、六部屋しかない二階家を優美だと讚美したのだが、

「六部屋というが、実質的には一部屋と同じですわね。階下でピアノをしたら、家中が音楽室になるではありませんか。一見優美ではあるが、住むのには不便でしょう？ 日本家屋は真面目でない。貴方の書齋で、机の代用の置きコタツ見せていただきましたが……炭火を少し入れて脚をあたためながら背をまるくして、あの上に原稿用紙をひろげて仕事をなさるんですって？ 涙が出ました。お寒いでしょう。パリに帰りましたら、どんな処で貴方の傑作がつくられるか、ラフォン氏にお話しますわ。何事も外側で見ただけで判断してはいけませんわね、内にはいつて生活してみなければ――」と、まったく新太郎に同情する口吻で、両手を火鉢にかざして外套をは

おった。

天井に鼠があばれ出したら、異国の婦人はきもをつぶすであろう。あわてて新太郎は家中の電燈をつけさせた。

翌晩、新太郎がホテルに迎えに行くと、マルセル夫人はすっかり化粧をして東夫人と待っていた。鼠色のサタンのデコルテに、真珠の頸飾くびかざりをして、ラッコの外套をかけ、夜会へ出るようなお化粧だ。あの有名なゲイシャ・ガールに会えるのだと思うと、うれしくて昨夜はねむれなかつたといった。今晚は予定のフランス外交官夫人の送別会も辞退したが、外交官夫人もゲイシャ・ガールと遊べるのなら、日本見学の最後を飾れると喜んで羨望せんぼうしたともいった。芸者にあうのだから、芸者に負けない化粧をした夫人のたしなみが、新太郎にはおかしかったが、夫人は車のなかでも興奮して、うきたっていた。

「マダム・アズマもゲイシャ・ガールと遊んだ経験がないんですって、驚きました。日本では殿方ムッシューだけがゲイシャ遊びをするんですってね。男女同権になつても、ゲイシャ・ガールの心は婦人に閉じられてるんですって？ 今晚はその門を私がマダム・アズマのために叩いてあげるようなわけですわ。でも、貴方ムッシューはよくゲイシャ遊びをなさるんでしょう？」

「いいや、戦後では、シャブリエさんを案内した時がただ一回です」

「ほんとう？ 信じられません。どうしてゲイシャ遊びをしませんの？」

「あまり興味がないもので——」

「どうして興味がないんですか」

「興味がないというより機会がないというべきかも知れないが」と、新太郎は苦笑した。

「それごらんなさい。私はマダム・アズマに頼んで、現在東京に幾人ゲイシャ・ガールがおるか、ゲイ

「シャ・ガールの置屋おきやが幾軒あるか、調べていただきましたが、その数の多いのにびっくりしました。殿方に興味のないものなら、そんなに多数のゲイシャ・ガールが存在するはずないものね」

「マルセル夫人はうきうき笑って、東夫人と顔を見あわせた。おそらく、新太郎がこの二十数年間待合へ行く機会も、その欲望もなかったと話しても、二人の夫人は信じなかつたろう。」

赤坂の小ぢんまりした待合だった。小柄な女将は丁寧迎えて、いい部屋のないことをわびた。マルセル夫人はゲイシャ・ハウスだということで、床の間から座蒲団、火鉢、女将や女中の挨拶の仕方、客のもてなし方、なんでも興味があつて、どんなつまらない日本語も通訳してくれと東夫人に頼んだ。

「フランスのご婦人のお客様とうかがって、この前のように精進料理でなければいけないかと心配しておりましたけれど——」

その通訳に夫人は答えた。

「アグネスの遊んだのもこちらでしたか、あの人は私の親友で、女将メザム、よくあなたのお噂をしていますわ、日本婦人の親切を知らせてくれた恩人だといつて——」

「とんでもございません」

「私はなんでもいただきますからご安心下さい。アグネスはお世話かけたつて申してましたが、菜食主義者で、女将を困らせたんじゃないやありませんか」

「お美しい方でしたが、お変わりもなくて——」

という風に、女将はあっさり退いた。シャブリエ夫人が同じ座敷で卒倒して、医者招くやら注射をするやら大騒ぎしたことには触れなかつた。

間もなく若い芸者がはいつてきた。マルセル夫人は目を輝かして迎えたが、新太郎は芸者を見るなり軽く失望した。服装といい化粧といいいわゆる芸者らしくなく、素人の娘しろうとが和服で現れたよううで、いき

なところもなく、美しくもなかった。雛菊ひなぎくと呼ぶその妓も、座敷にフランスの女と日本の女と新太郎を見出して、明かに予期しなかつたようなあわて方で、酌をするのもおずおずと、どう座をとりもつていいか当惑している様子だった。

「こちらフランス人ですか、お綺麗きれいですわね。お肌の色がさえて艶のあること……綺麗だわ。こんなに肌を出していてお寒くないかしら。金髪もみごとで、服の色がマツチして、すてきですわ。羨しいくらいお美しいけれど、お年はいくつでしょうか」

そう新太郎に囁ささやいて、ぼんやりマルセル夫人の頭からなげ出した脚まで眺めている。たしかにパリの女性としても美人の方で、しかもまだ三十四、五歳の女ざかりであるから、雛菊が見とれるのも無理はないが、客をじろじろ眺めるのは芸者でなくても失礼である。

「せっかくフランス人が芸者を見たいというので来

たんだから、何か芸者らしい唄でもきかせてやれな
いかねえ」

「困ったわ……あとで誰かおねえさんが来ますから、
その時になさってね」

雛菊はお酌をするしか能がないようで、客が話し
かけなければ、つんとすましているだけだ。

「どうして日本髪になさらないの」

「島田は重いでしょう？ でもフランス人のお座敷
と知ったら、かずらをしてくればよかったですわ」

「今ではおねえさん達みなさんパーマですの」

「若い人はほとんど全部……ヘップバーンにしてい
る方もあります。かずらにはあの髪の方がずっと便
利です」

そんなことを東夫人と話していた。夫人がいちい
ち通訳したが、今度はマルセル夫人が雛菊にきいて
もらった。

「毎日どんな風にお暮しになりますの」

「そうねえ、普通のお嬢さんと、そうちがいませんわ。ただ違うのは、踊りと三味線を習いに行くぐらゐのことではないでしょうか。それと夜働くこと——」

「踊りと三味線の勉強のほかに、芸者の修業みたいなものはありませんか——」

「そうねえ、着物の着こなし方だとか、お作法など、芸者の修業というのかしら」

「踊りや三味線や芸者の修業はたいへんですか。苦しいことがあります?」

「さあ、それ、その個人個人の事情で、大変な人も、案外楽な人もあるのじゃありませんか」

こんな話のやりとりを味気なく眺めていた新太郎に、突然雛菊は、「ねえおにいさん」と呼びかけた。

「おにいさんだって、おどかさないでくれよ」

「だって、小父さん、先生——なんてお呼びしたらかえっておかしいでしょう」

「それだからって、おにいさんと呼ぶ手はないだらう」

「おにいさんて男の代名詞よ。私はおにいさん処のお嬢様と同級生よ、A学園で——」

「ええ、おどかさないでくれよ、娘は幾人もあるからな」

「冬子さんよ——今晚は忙しかったけれど、先生のお座敷だって、いうから無理したのよ。愛読者というより、冬子さんへの友情で——」

「それならどんどんフランス語でマダムに話しかけなさい」

「それが、学校でなまけていたから、ウイ(はい)かノン(いいえ)ぐらいで——」

雛菊が新太郎の三女の同級生で、フランス語を教える有名なミッションスクール出身者だとわかると、マルセル夫人は目を輝かして、どうして芸者になつたかきかせて欲しいと、雛菊の自尊心を傷つけない

ように面倒ないいまわしで熱心に話しかけた。しかし雛菊の方は、事もなげに、これも戦争のためだと答えていた。

「戦争に敗けたでしよう、アメリカ軍に占領せられて、父は追放になり、やれ新田のきりかえだ、やれ財産税だって……私共の階級には革命があつたんですわ。父が職業と財産をはぎとられたら、私たちに生きて行くなつてことみたいでした。それでもどうやらたけのこ生活をして数年すごしましたが、昔のいい時代にはもどりません。父も母も年とつて働く気力も職場もなし、そうかといつて、ただで食べさせられるところもないんですもの。私が働かなければ、親子心中するより他ありません。女の子が働いて、親を養うなんて、日本ではできませんわ。……芸者でもしなければ。今まで身につけた教養を生かし、気品をおとさないで労働のできるのは、芸者と私は思います」

こんな調子に雛菊は話し出した。異国の婦人をもてなす術がないから、問われたことをこれ幸いと熱心に答えようとするのだろうか。マルセル夫人もいちいちうなずきながら感心して、心にとめるように聞いていた。通訳せられる雛菊の話から、一人の芸者を胸のなかに創りあげるのだろうか、雛菊もまた話しているうちに身上話に少しずつ創作を加えて、自分に似た一人の雛菊という芸者をでっちあげているのだろうか。というのは、新太郎が娘の冬子からきいていた旧友の芸者は、雛菊の語るのとかなりちがつていた。

冬子がA学園の小学部から中等部に進級して、一年もたたない頃、一人の同級生が芸者の子だということがわかつて、毛嫌けがらいされて遊びてがなくなつたと、家に帰るなり、可愛想よ、可愛想よと、幾度もその同級生の噂うわさをしたことがある。みんなが仲間はずれにするから、私一人遊んでやるのよと、その後

もよく大山さんと呼ぶ子の噂をした。

冬子と大山さんの友情は二年もつづいたろうか、いつの間にか、冬子の口からこの可愛想な友達の話が出なくなつた。女学生の交友はわけもなく変化するのだから、それを新太郎は不審にもしなかつた。それから数年たつて、冬子はA学園を卒業して、前年の春、はじめての同窓会から帰るなり、もう結婚した友達があると笑つて語りながら、

「大山さんね、やっぱり芸者になつたんですつて……赤坂から出ているんですつて」と、尖つた目をして見せた。

「へえ、芸者にねえ……あんまり器量もよくなかつたようじゃありませんか」と、母親も驚いていた。

「今日の会に出席しましたか」

「欠席よ、ヤ、マ、チ、ヤ、ン、でも芸者になれるなら、自信を持てるなんて、みんないつてたけれど……あの人のママは芸者だったし大山さんの二号で、なんでも、

今では赤坂で芸者を六人もかかえたおかみさんをしてゐるから、あの人の場合は特別ですつて。A学園の尼さんが知つたら、どんなに悲しむでしょうね」
「A学園の卒業生が芸者になるようなご時世になりましたかね」と、母親は歎息したものだ。

新太郎はその時々々の冬子の表情まで思い浮べて、雛菊を眺めていたが、雛菊は豊かな丸顔を傾けてマールセル夫人に、

「かつて父は貴族院議員、母は貴婦人であつても、そのことが現在の私をどうしてもくれませんもの、私は一生懸命かせぐよりありませんわ」と、つとめて悲しそうにするが、あまりに豊かな丸顔のせいかな、悲しい表情ではなかつた。

「君はヤ、マ、チ、ヤ、ン、といつたんじゃないやなかつたかね」と、新太郎はそつときいた。

「雛菊でございます」と、とぼけて両手について新太郎におじぎをしてみせた。